

中部の

エネルギーを 築いた

人々

尾鷲電気株式会社の創立者

浜田常助

三重県は東に伊勢湾、南に熊野灘を臨む、東西108^{キロメートル}、南北170^{キロメートル}の細長い県である。三重県下の電気事業は、1896(明治29)年設立された津電灯(株)が津に、同年、四日市電灯(株)が四日市に点灯したのが最初である。その後、それぞれの地域に文明の明かりをともしていった。

この熊野灘に面する東紀州尾鷲地方で地元有志による電灯会社の設立が進められ、1910(明治43)年、尾鷲電気株式会社が資本金30万円で設立され、浜田常助が取締役社長に就任し、供給区域を順次拡大していった。今月号は、1927(昭和2)年、三重合同電気に合併されるまでの17年間の電気事業を紹介する。



浜田常助

〔1856(安政4)～不明
(出典：三重県紳士録)〕

尾鷲電気を設立した浜田常助

浜田常助は1857(安政4)年、地元で林業と呉服商を営む資産家の浜田退助の2男として尾鷲町中浦で生まれた。尾鷲町会議員、北牟婁郡会議員などを歴任し、さらに尾鷲銀行取締役を歴任するなど尾鷲地方の産業発展に務めた。

(1) 吸入ガス機関による尾鷲発電所

尾鷲電気は、1910(明治43)年に尾鷲発電所(出力：75kW)を尾鷲町中井浦の本社と隣接して建設した。北隣にはヤーヤー祭りで有名な八幡神社がある。この発電所は、中部地方で最初の吸入ガス機関を利用したもので、設備概要は次のとおりである。

出力	機器	設備概要
75kW	汽機	吸入ガス機関、ラストン社製、129馬力
	発電機	GE社製、3相交流式 3,500v、120HZ

吸入ガス機関は、吸入ガス発生装置のガスを利用し発電を行うガス機関である。ガスの原料には無煙炭、コークス、木炭が利用された。当時ガス発電用に使われたガス発生装置は、小規模火力用の吸入ガス機関と、大規模火力用の圧力ガス機関の2つがあった。このうち、吸入ガス機関はガス機関の吸入作用を利用して発生炉内に空気・蒸気を送りこんでガスを発生させるものである。負荷が増大してガスの需要が多くなると、吸入作用が強くなってガス発生量が増え、逆に負荷が減少するとガスの発生が減少するのでガス溜などの装置が必要なく、①備え付けが簡単②取り扱いが簡便③煙突が不要といった利点を持ち、小規模発電用に広く使われた。

しかしこの方式は、経済性、安全運転上に問題があり、またシリンダーで爆発させ、廃棄する際に大きな音が出るという問題もあって、電力供給網が整備され、他から電力が供

給されるようになると順次廃止されていった。

尾鷲市史には「燃料の石炭は、船で運び、尾鷲町の前の浜へあげた。ピストンの水平運動を回転運動に変える際、その回転力を大きくするため、直径2メートルほどの振車が付けられた。車軸と振車を結ぶベルトは、帯状のものを使うのが普通であるが、この発電所のもは直径40センチほどの木綿の綱であった。まだボール・ベアリングのなかった時代だから、車軸受けの所には鉛・錫・銅の合金が使ってあ

った。ピストンの音はたいしたことはなかったが、クランクのどんどんという音が特別に大きくて、夜間は隣村の海山町便の山まで響いたという。」と記述されている。

1928(昭和3)年に廃止となり、その後は倉庫として使用されていたが、1944(昭和19)年12月の東南海地震の津波被害で流失した。

(2) 又口川発電所、銚子川第一発電所の建設

日露戦争後の1907(明治40)年頃から炭価の高騰などにより、全国的に水力発電の開発が盛んに行われた。

尾鷲電気は、大台ヶ原の山系を水源にした又口川と銚子川に、1919(大正8)年、又口川発電所、1924(大正13)年に銚子川第一発電所を建設した。その概要は次のとおりである。



	又口川発電所	銚子川第一発電所
所在地	尾鷲市南浦矢所	紀北町海山銚子滝
出力	145 kW	120 kW
水路長	2,718m	1,198m
有効落差	39.5m	38.8m

- ① 又口川発電所—京良谷で銚子川本流をせき止めて、その水を下流の矢所まで導水し発電所を設けた。導水路は石積み(幅：1メートル、深さ：80センチメートル)で、その中に板の樋(厚さ：6センチメートル)を入れたもので、1936(昭和11)年、設備老朽により廃止された。
- ② 銚子川第一発電所—銚子川に銚子川第一発電所を建設し、尾鷲、海山町に電力を供給した。中部電力となっていた1963(昭和43)年、洪水で破壊したため廃止された。

尾鷲地方に本社のある最大会社になった尾鷲電気株式会社

尾鷲電気は、水力発電開発のため、1921(大正10)年、増資を行い資本金60万円に

なった。

当時の電灯供給区域は、尾鷲町・引本町・

相賀村・船津村・桂城村・須賀利村で、電力供給区域は尾鷲町・引本町で、従業員は合計31名（支配人1名、管理者5名、主任技術者1名、書記4名、技手1名、電工7名、電工見習い5名、事務3名、工務4名）であった。

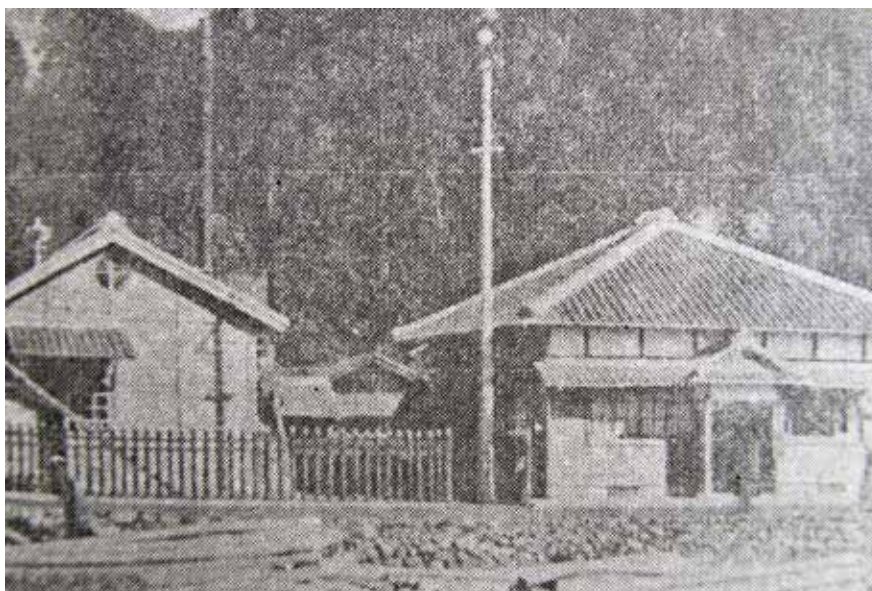
設立当初からの大株主上位5人は、①安保庸三（1,540株） ②土井八郎兵衛（700株） ③浜田常助（700株） ④土井与八郎（658株） ⑤土井忠兵衛（655株）であった。

このうち、安保庸三は、松阪軽便鉄道社長、松阪水力電気株式会社の専務取締役などを勤め活躍した松阪在住の実業家であった。土井与八郎は尾鷲電気の監査役、尾鷲銀行の取締役を勤め、土井忠兵衛は尾鷲電気と尾鷲銀行の取締役を勤め尾鷲地方の産業振興に理解と期待を担った実業家であった。

また、土井八郎兵衛は山林王と呼ばれた林業家で植林方法を改善し、水力応用の挽材機や原動機を用いて経営を飛躍的に発展させた。さらに1897（明治30）年、株式会社尾鷲銀行を創立し頭取に就任した。その後、尾鷲銀行は経済界の不況が始まる1920（大正9）年、百五銀行、紀北商業銀行の3銀行が合併して、株式会社百五銀行の名称のもとに、尾鷲地方を営業するに至った。

また、尾鷲電気は1922（大正11）年、九鬼電灯（株）を合併するなどしたが、1927（昭和2）年、三重合同電気（株）と合併、三重合同電気は昭和5年に合同電気と改称、1937（昭和12）年に東邦電力に合併するに至った。

（寺澤 安正）



尾鷲電気株式会社 左・発電所 右・本社（出典：尾鷲市史）